

2012年度日本中医学会学術総会 「シンポジウム」の“注目ポイント”

シンポジウム① (9月1日 15:10) 大ホール

「科学的エビデンスに基づいた伝統医学に向けて」

注目ポイント

本シンポジウムは「先端科学と伝統医学の融合」を目指したシンポジウムである。「先端科学と伝統医学の融合」は伝統医学としての中医学の有効性を科学的に実証し、一般医療に中医学を普及させるために極めて重要なテーマと考えている。本シンポジウムは、日本で最近開発されたハイパースペクトラルカメラ（山本智史先生：慶應義塾大学医学部 漢方医学センター助教）と触覚センサー（尾股定夫先生：日本大学工学部教授）の中医学診断への応用に関する演題、及び心と体の新しい概念について心理学（春木豊先生：早稲田大学名誉教授）と皮膚科学（上田英一郎先生：大阪医科大学皮膚科准教授）の立場からの演題により構成されています。日本独自の新しい中医学を発信していくために本シンポジウムが重要な役割を果たしていくものと考えています。 (酒谷 薫記)

座長：酒谷 薫（日本中医学会理事長，日大医医学部脳外科教授）

西本 隆（西本クリニック院長，神戸大学医学部臨床教授）

【シンポジスト】

山本 智史「ハイパースペクトラルカメラによる舌診」（慶應義塾大学医学部 漢方医学センター助教）

春木 豊「身体心理学について」（早稲田大学名誉教授）

尾股 定夫「触覚センサー」（日本大学工学部教授）

上田英一郎「心身医学による皮膚疾患の治療」（大阪医科大学皮膚科准教授）

「震災において伝統医学ができること——伝統医学を用いた医学・医療・介護の再生」

注目ポイント

伝統医学の特色は、カラダとココロの状態を同時に診ること、健康に生活するために必要な食事をはじめとした日常生活のアドバイスができることです。

伝統医学が持つこのような特色を活用することにより、東日本大震災でうけた大きな傷を癒やすのみならず、よりよい復興事業を提案できるものと思います。具体的には、単に伝統医学を用いた医学・医療のみならず、介護さらには教育・産業にも伝統医学の考え方を活用した事業が可能です。

中国および韓国の国立の伝統医学研究所からそれぞれの副所長を招聘し、中国と韓国の伝統医学を活用した震災復興事業への提言をいただく予定です。また、すでに動き出した復興事業についてご紹介します。

震災の悲劇から未来に向けて、一步踏み出す。そのときに、伝統医学を活用する、そのヒントを探ろうと思います。

(関 隆志記)

座長：関 隆志（東北大学大学院医学系研究科先進漢方治療医学寄附講座講師）

【シンポジスト】

呉 中朝「四川大地震における中医学の貢献と今後の対策（仮題）」（中国中医科学院教授）

キム ジョンヨル「四象医学を生かした被災者健康診断の試み（仮題）」（韓国東洋医学研究所（KIOM）副所長）

飯塚 顕「生薬を活かした復興まちづくり—涌谷町の試み」（東京医科歯科大学（元外務省職員））

桜井 充「被災地復興に生かす統合医療」（参議院議員（心療内科医））

「漢方と中医学の架け橋——日本漢方の症例や治療法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出」

注目ポイント

日本中医学会は中医学を日本の医療に導入し活用することを使命としているが、日本で行われている漢方医学との接点を探り、融合の道を模索することも大切と考える。本シンポジウムは、今学術総会の総合テーマの副題「東アジア伝統医学の発展の可能性」を受けて、日本の漢方医学の症例や治療法、方剤運用法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出することを目的とする。

座長は常日頃日本漢方を世界の視野から考察されている安井廣迪氏。各演題は、まず漢方医学の黄金時代の江戸期の漢方の医案から学ぶことを平馬が抽出する。矢数芳英氏には、昭和の漢方の大家矢数道明師の臨床を中医学の視点で解析いただく。加島雅之氏には昭和から現代に至る漢方を評価し、その普遍的価値を剔出していただく。中医学と漢方の比較に長年取り組んでこられた戴昭宇氏には中医師から見た日本漢方を評価していただく。

日本漢方の遺産と現代の姿を中医学の視野から分析してその発展性を探り、中国医学をルーツとする東アジア伝統医学の共有財産となる可能性を議論したい。

(平馬直樹記)

座長：安井廣迪（安井医院院長）

【シンポジスト】

平馬 直樹「江戸の医案を解析する」（仮題）（平馬医院，日本中医学協会会長）

矢数 芳英「矢数道明の臨床」（仮題）（矢数医院，東京医科大学麻酔科）

加島 雅之「現代漢方を評価する」（仮題）（熊本赤十字病院内科）

戴 昭宇「中医師からみた日本漢方」（仮題）（東京有明医療大学保健医療学部鍼灸学科准教授）

「湯液（漢方）と鍼灸の理論の架け橋——湯液（漢方）の理論と鍼灸学理論の異同とそこから見えてくる新たな中医学の方向性」

注目ポイント

中医学の精髓は、弁証論治である。これは湯液治療、鍼灸治療において共通している「同」の部分であり、今日までこの部分が強調されてきた。多くの先人達が臓腑弁証にもとづく弁証選穴・配穴により多種の疾患に対して良好なる成果を収めてきたことは周知のとおりであり、これは継承しなければならない。しかし一方で、これまでの鍼灸の弁証論治は臓腑弁証に偏りすぎていて、経絡系統による診察・診断システムと治療システムをあまり強調してこなかったとの指摘がある。湯液と鍼灸の「同」の部分共有しつつ、今まで以上に経絡系統を十分に活用した鍼灸独自の「診断即治療」システムの構築が加味されるならば、鍼灸治療の「幅」はいっそう拡大することであろう。本シンポジウムでは、まず湯液治療と鍼灸治療の「同」の部分の再確認を行い、さらに現在中国でも検討がなされている経絡系統を十分に活用した中医鍼灸の独自性、可能性をさぐってみたいと思う。本シンポジウムが中医鍼灸学の再構築に向けた第一歩とならんことを期待する。

(兵頭明記)

座長：兵頭 明（学校法人後藤学園中医学研究所所長）

王 曉明（帝京平成大学ヒューマンケア学部はり灸学科教授）

パネルディスカッション (9月2日 9:10) 小ホール

「日本に根付いてきた中医鍼灸——日本各地の中医鍼灸研究会の活動報告」

注目ポイント

1970～1980年代に日本にもたらされた弁証論治に基づく現代中医鍼灸はあくまで中国で生まれたものであり、日本の風土や社会状況に合わせて定着するには、それなりの時間が必要であった。それから20年以上の時を経た現在、時・地・人の隨機制宜を踏まえた中医鍼灸の研究や臨床を行っているグループが日本各地に存在するようになってきている。今回の大会では、そうした地道な活動を続けてきた中で得られた問題や経験を出し合い、日本における「中医鍼灸」の今後のあるべき姿を討論する。

討論内容は以下の通り

- 1) 中医鍼灸との出会い(どうして中医鍼灸を取り入れようと思ったか)
- 2) 中医鍼灸のメリット、デメリット
- 3) 中国で学んだ内容と日本で実践している内容との方法論に違いはあるか？あれば、その理由と変更した内容は何か。
- 4) 経絡治療、現代的病態把握にもとづく診療方式と比してその特徴は？
- 5) その他

(浅川 要記)

座長：浅川 要 (東京中医鍼灸センター院長)

篠原昭二 (明治国際医療大学伝統鍼灸学教授)